

↓ 当案内及び過去に発行した案内は弊社ウェブサイト(<http://www.medience.co.jp/>)よりPDF形式にてダウンロードできます。

新規受託項目のお知らせ

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素より格別のお引き立てをいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、弊社では皆様のご要望にお応えするため、検査の新規拡大に努めておりますが、この度、下記項目の検査受託を開始することとなりました。

取り急ぎご案内致しますので、宜しくご利用の程お願い申し上げます。

敬具

記

新規受託項目

オピオイド系鎮痛薬4項目

- [26783] モルヒネ
- [26787] オキシコドン
- [26788] フェンタニル
- [26789] コデイン

受託開始日

- 平成28年8月23日 (火) 受付分より



血中薬物検査（オピオイド系鎮痛薬）

医療用オピオイドはがん性疼痛の緩和に優れた効果を発揮し、また生命予後の改善にも繋がるものとして、WHOによる『三段階除痛ラダー』などでも早期からオピオイドを使用することが推奨されています。しかしながら、わが国の緩和医療におけるオピオイド使用率は他の先進国に比べて低水準に留まってきました。その背景には薬物依存や副作用に対する懸念もありますが、オピオイド鎮痛薬の処方・使用方法が必ずしも標準化されておらず、医師の経験に委ねられることも一因と思われます。

実際、オピオイドの必要量の個体差は大きく、患者個々のオピオイド感受性が数倍に及ぶとの報告もあります。理論的に、オピオイドが鎮痛効果を発揮するには“最低有効鎮痛濃度（minimum effective analgesic concentration）”を超える必要がありますが、その血中濃度は患者の肝機能・腎機能はもとより、薬物代謝酵素の遺伝子多型などの諸要因の影響を受けます。こうしたさまざまな課題がありつつ、“麻薬”として法的規制の対象でもあるオピオイドの血中濃度測定は一般に行われておらず、投与量と鎮痛効果の間の明確なエビデンスが未だ乏しいことは否めません。

弊社ではISO/IEC17025国際認定を受けた麻薬検査の実績を活かし、この度、医療用オピオイドの血中濃度測定の受託を開始することと致しました。医療用オピオイドの適正使用のため、投与量-血中濃度相関のデータ蓄積などの手段に利用されることを期待しております。

検査要項

項目コード	26783	26787	26788	26789
検査項目名	モルヒネ ^{*1}	オキシコドン	フェンタニル	コデイン
検体量/保存方法	血清 各0.3mL ^{*2} /凍結 [容器番号：03→容器番号：02]			
検査方法	LC-MS/MS			
基準値	(設定せず)ng/mL			
所要日数	5~11日			
検査実施料	未収載			
備考	*1：モルヒネおよび代謝物であるモルヒネ-3-グルクロニド（M3G）、モルヒネ-6-グルクロニド（M6G）の各定量値をご報告します。 *2：分離剤入り採血管は使用しないで下さい。測定値が分離剤の影響を受ける場合があります。			

参考文献

久保田敬乃, 他：炎症と免疫 24：135-138, 2016

住谷昌彦：クリニックマガジン 43 (3)：15-17, 2016

日本緩和医療学会：がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン 2014年版